

クリミア戦争直後のイヴァン・アクサーコフ スラヴ主義から汎スラヴ主義への展開

大 矢 温

はじめに

一般に19世紀40年代にスラヴ派は西欧派に対してロシアの特殊性、スラヴの民族性を主張して論戦を挑んだことが知られている。その後、クリミア戦争後に農奴制改革を含む一連の改革が進む中で、従来もっぱら国内問題に注目していたスラヴ派は、国外のスラヴ系諸民族に目を向けるようになる。こうしたスラヴ派の思潮は、70年代の後半には国民的な汎スラヴ主義の奔流へと展開することとなるのだが、その過程において、クリミア戦争はスラヴの問題がロシアの国内問題から国外のスラヴ系諸民族をも含む国際問題へと転換したという点で、一つの画期であった。本稿では、国外のスラヴ系諸民族の団結、およびその中心としてのロシアの意義を説く汎スラヴ主義思想の唱道者としてイヴァン・アクサーコフに注目し、クリミア戦争直後の彼の言動を、雑誌『ロシアの談話 Русская беседа』、および新聞『帆 Парус』、『日 День』を素材にして分析してみたい。

I. 『ロシアの談話』と『帆』

1853年に始まったクリミア戦争は、緒戦こそロシアが老大国オスマン・トルコを圧倒したものの、その年の暮れにシノペ沖海戦でロシアがトルコ海軍を殲滅したことに危機感を抱いた英仏連合軍が参戦してから、戦況は一転してロシアに不利なものとなった。55年2月にはロシア側最高責任者であるはずのニコ

ライー世が突然、死去する一方、難攻不落を謳われたセヴァストーポリも8月には陥落し、ロシアの敗戦は確実なものとなった。このような危機的な状況の中でA.C. ホミャコフ、Ю.Ф. サマーリン、K.C. アクサーコフ、およびA.И. コシェリョーフといった、40年代にスラヴ派として論壇をにぎわした論客たちは、新帝アレクサンドル二世の元での改革の可能性を信じ、新たな雑誌の発行を計画したのであった。雑誌の名前は『ロシアの談話』と決められた¹⁾。

1856年に実際に発行が許可されると、新しい雑誌『ロシアの談話』は、コシェリョーフが発行者兼編集者となって年4回発行されるようになった。投稿者としてはИ.С. アクサーコフ、И.Д. およびИ.В. ベリヤーエフ、Т.И. フィリッポフ、そして理論的には必ずしもスラヴ派に属してはいなかったが、スラヴ派のグループに近いB.A. チェルカッスキー公爵などがいた²⁾。ところがまもなくコシェリョーフがリャザン県の農奴解放委員会の委員になったため、58年8月号からイヴァン（兄のコンスタンチンと区別するために、本稿ではイヴァン・アクサーコフを単に「イヴァン」と表記する）が実質的な編集者となる³⁾。ここで指摘すべきは、上記のように、『ロシアの談話』はスラヴ派が中心となって創刊した雑誌だったが、必ずしもスラヴ派の独占物ではなかった、という点である。

ところが58年に雑誌の編集を任されると、イヴァンは大いに意気込み、スラヴ派の定期刊行物としての性格を明確に打ち出すようになった。59年から年6回と発行回数を増やし、さらに新たに「スラヴ欄」を設けて雑誌の方向性を打ち出そうとした。おりしも当時ロンドンで自由出版活動を続けるA.И. ゲルツェンの出版方針を巡って、左右両派がその自由出版の方針を批判したいいわゆる「Very Dangerous!!! 論争」に見られるように⁴⁾、クリミア戦争後の改革期において雑誌各誌は党派性を帯びつつあった。そのような状況の中で新たに実質的な編集者となったイヴァンは、従来スラヴ派の独占物ではなかった『ロシアの談話』をスラヴ派の党派的な雑誌にしようとしたのだ⁵⁾。

さらにイヴァンは翌1859年1月1日から別の定期刊行物『帆』を出版するべく準備にかかった⁶⁾。発刊に向けてイヴァンは、1858年12月号の『ロシアの談話』に「1859年における新聞『帆』の出版について」と題する声明を発表して

クリミア戦争直後のイヴァン・アクサーコフスラヴ主義から汎スラヴ主義への展開（大矢 温）

自らの新聞『帆』に込める思いを表明している⁷⁾。この声明においてイヴァンは、クリミア戦争後の検閲緩和に伴うジャーナリズムの活性化を踏まえて、「ロシアのジャーナリズムがその存在の新しい時代に足を踏み入れた」ことを宣言する⁸⁾。イヴァンによれば、現下のロシアのジャーナリズムの使命は、公開の論壇で現実的な問題について審議することであった。「今日、その課題は公開性の道具を創造し知的な活動呼び起こすのではなく、すでに呼び起こされた活動の表現となること、すでに創造された道具を知識と生活のため、仕事において使用すること、現存する諸問題の解決に参加すること」であった⁹⁾。このような状況においてジャーナリズムに求められることは、一般的な読者層に対して普遍的な啓蒙を語るのではなく、特定の「方向性」を持って彼らを導くことなのだ。と、イヴァンはこのように新聞『帆』が「方向性」を持つことの重要性を強調する。その際の「方向性」とは、言うまでもなく『ロシアの談話』と同様に、スラヴ派の「方向性」である。「『帆』は全く別で自立した出版物でありながら、『ロシアの談話』と同じ方向性に属している」¹⁰⁾。

この時点でのスラヴ派の「方向性」とは具体的には、ロシア民族の独自性を前提とした農奴制改革における共同体の保持と土地付き解放の主張であった。それは「しばしば嘲笑され中傷され」敵対者の攻撃に晒されて来たが、今では「そのもっとも熱烈な敵対者にすら受け入れられ、繰り返されている」¹¹⁾とイヴァンは誇らし気に語るのだが、これは西欧派急進派のH.Γ. チェルヌィシエフスキーがスラヴ派の主張を一部認め、雑誌『同時代人』において共同体の意義を説くようになったことを指している¹²⁾。

ここでは西欧派の拠点であった雑誌『同時代人』を論破した、とのイヴァンの自信を垣間見ることができる。ロシア民族の特殊性、という点でイヴァンは西欧派を論破した、と確信しているのである。この確信を背景に、「偽りの非難や排他性を恐れず」自信を持ってイヴァンは新聞『帆』の「旗印」を掲げる。「我々はあえて我らの旗印を掲げる」。その「我らの旗印とは、**ロシアの民族性**（隔字体）」である¹³⁾。「ロシアの民族性」を旗印に西欧的な「現代的なモード」を批判するこの声明の内容は、当然のことながら『同時代人』に対する鞘当て

であった。

このように新聞『帆』の一般的な性格を表明した後で、イヴァンは『帆』の編集上の「綱領」を宣言する。それは「人民と社会生活における現在のロシアの現実の問題を研究する」、というものだった。イヴァンは一般に理解されない純粋学問的な論文ではなく、農奴制改革に向けた具体的現実的な議論を呼びかけたのだった¹⁴⁾。農村共同体を保持した、土地付きの解放をもくろむイヴァンにとって、農村共同体の現実を研究することは、焦眉の課題だった。この見地からイヴァンは民俗学の研究、「生活習慣や伝説の研究」を特に歓迎した¹⁵⁾。さらに続けてイヴァンは、雑誌の構成に関する計画を開陳する。彼によれば『帆』には「批評欄」、「地方通信欄」、そしてスラヴの地からの手紙とニュースを伝える「スラヴ欄」が予定されていた¹⁶⁾。ロシアのみならず、スラヴ民族一般へと視野を広げようとしたのであった。そのために彼は、ポーランド人、チェコ人、セルビア人、クロアチア人、ガリツィアのルシン人、ブルガリア人などに「常勤通信員」として情報を提供するように「スラヴ欄」への参加を呼びかけたのだった。

少なくともイヴァンのこの声明においては、のちに表面化するロシアの拡張性は見られない。農奴制改革が目前に迫ったこの時期、イヴァンの関心は農村共同体の研究にあった。それは西洋の個人主義に対するロシアの共同体の擁護であり、論戦の舞台は来るべき農奴制改革の方向であった。彼にとってスラヴの問題とはあくまでもロシア国内、それも間近に迫った農奴制改革の問題だった。農奴解放議論においてスラヴの特殊性を議論の前提にする以上、イヴァンは他のスラヴ民族の状況に関する情報を必要としていたのだ。「全人類の啓蒙の自立した（隔字体）活動者となり、新たな力によって老朽化した世界を一新するために」「スラヴ諸民族にとって必要なこと」は、「物質的な成功のみならず、スラヴの基本的な諸原理の認識、研究、保存と仕上げ」である¹⁷⁾。

したがってイヴァンがスラヴ諸民族に向かって訴えるときも、そこにロシアの拡張思想はない。むしろスラヴの各民族の独自性を尊重する立場である。「ロシアの民族性を我らの旗印に掲げてはいるが、すべてのスラヴ人種の民族性を

クリミア戦争直後のイヴァン・アクサーコフスラヴ主義から汎スラヴ主義への展開（大矢 温）

認めているのだ」。「スラヴの精神的な統一の名において、我々ロシア人は、兄弟の手をすべてのスラヴの民族性に伸ばすのだ」。「それら各々が完全に独特に発展することを！ 各々の人種が自らの仕事の分担分をスラヴの啓蒙という共通の大儀にもたらすことを！ 各々が自由に、勇敢に、障害なく自分自身の勲功を立てることを、自らの言葉を宣言し、自らの分相応の能力によってスラヴ精神の共通の資源を豊かにすることを！」「我々すべては」「自ら、多面的なスラヴ精神の様々な側面を表現しながら、お互い、相互補完しながら、友好的な仕事の総和によってのみ、十全たるスラヴの発展を達成し、自らの知的精神的特殊性を守り抜くことができるのだ」¹⁸⁾。このようにイヴァンのスラヴへの呼びかけはあくまで「精神的な」連帯であり、「政治的」、つまりロシア国家の拡張とは無縁だった。「外的政治的なものではなく、内的精神的な統一が我らには重要なのだ」。そしてその上でイヴァンは、このような「呼びかけ」が必ずやスラヴ諸民族に反響を呼び、「人種的精神的な兄弟的連合を復旧すること」を確信するのだった¹⁹⁾。

ところでイヴァンは『ロシアの談話』と『帆』をチェコ語、セルビア語、ブルガリア語やポーランド語にも翻訳する予定だった²⁰⁾。ロシア以外のスラヴ系諸民族にスラヴの民族意識を宣伝するためであった。同時にイヴァンは、他のスラヴ民族、特にブルガリア人を支援する活動を展開するために、「スラヴ協会」という組織を設立することについても計画を立てていた。

ところが、『帆』紙上からのスラヴへの呼びかけは長く続かなかった。イヴァンの『帆』はたった2号を出した時点で発禁処分となってしまったからだ²¹⁾。この間の事情をイヴァン自身がM.Φ. ラエフスキーへの59年4月13日付の書簡の中で説明している。「スラヴの民族性」を「旗印」にした新聞『帆』は「恐ろしい騒ぎと轟き」、「巨大な共感」、を公衆の間に引き起こしたが、他方、スラヴ派的な「民族性」の主張は政府の側に「危惧と恐怖の念」を巻き起こした、と。「西欧派もロシア社会主義者も、政府にとってモスクワのスラヴ派ほどは恐ろしくはない」²²⁾。

特に外務大臣のゴルチャコフはスラヴ派の「民族性」の主張を警戒した。ア

クサーコフが説く「スラヴの民族性」の主張の中に民族自立の主張を読み取ったからである。ゴルチャコフはこのような民族自立の訴えが、帝国内に多数のスラヴ系住民を抱えるオーストリア政府を刺激することを恐れた。クリミア戦争後の疲弊したロシア帝国にとって隠忍自重は外交の基本であった²³⁾。そこでゴルチャコフは皇帝に上奏して、「民族性」の感情の危険性を訴える。ポーランド人については、彼らの中に「スラヴの感覚を呼び起こし、彼らにロシアに対する彼らの勝利の時代という過去を思い出させる」、つまり民族的独立の上にリトアニア・ポーランド大公国の版図の要求を引き起こす可能性があったし、オーストリアに住むスラヴ系諸民族であるチェコ人やセルビア人には「とうに廃れた民族性の感情」を呼び起こし、オーストリア国内での独立運動につながる可能性があった²⁴⁾。こういったことが「オーストリアの目に我が国の評判を落とすことになるかもしれない」²⁵⁾と彼は警戒したのだった。

このように自ら「旗印」とした「民族性」が政府内で危険視されたためにイヴァンの『帆』は禁止されてしまった。しかも第三課内部では『帆』の禁止のみならずイヴァンの流刑すら検討されていた。幸い、流刑には至らなかったものの、ゴルチャコフらの危惧によってイヴァンは『帆』という貴重なスラヴ主義の機関を奪われてしまった²⁶⁾。この発禁処分についてイヴァン自身は、『帆』に対する「公衆の間の共感は巨大なもの」だった、と回想し、「スラヴ問題がロシアにおいて人気を博すことは疑いない」「それは非常に重要なことだろうし、その時初めてスラヴ人への共感が現実的なものとなり、果実をもたらすことになるう」²⁷⁾とスラヴ問題に対する公衆の関心を期待してはいるが、彼自身も認めているように、それは「1年以内」のこと、つまりは現時点ではなくて、あくまで未来への期待であった。

このように総じて『帆』はロシア社会に確固とした支持基盤を見いだすことが出来なかった。国外のスラヴの問題についてロシア社会は冷淡だったのだ。実際、イヴァンは嘆く。「現在スラヴ人のための寄付はスラヴ派の小さなサークルに依存している。何百万も持っている商人たちは1コペイカも寄付しないと²⁸⁾。

クリミア戦争直後のイヴァン・アクサーコフスラヴ主義から汎スラヴ主義への展開 (大矢 温)

さて、『帆』の発禁後、イヴァンはすぐに別の新聞を発行する準備にかかった。新しい新聞の名前は『汽船 Пароход』になる予定だったが、これは『帆 Парус』を連想するために許可されなかった²⁹⁾。さらにスラヴ派の新聞に難色を示す外務省の意向で、通常の検閲規則の上にさらに新聞の発行許可に当たっての条件を課すべく政府内で審議が行われた。発行許可条件は、ゴルチャコフの案に従って大臣会議で決められたものだったが、それはまず第1に「スラヴの民族性が独自の発展をする権利について」新聞に掲載することを禁じ、第2に「最小の政治的性格も」持つことを禁じられた。さらに第3に「新しい新聞の宣伝において『帆』について語らないこと」という制約を課したのだった。これはイヴァンにとって承伏しがたいものだった。「誠実な人にとって、それに自発的に合意する可能性は全くなかった」。そこで「われわれは断った」³⁰⁾。

この時期、『帆』のほかにも、ペテルブルクでは『ポーリスコエ・ヂェーロ』が発禁になり、編集者が投獄されるという事件が起こっていた³¹⁾。他方、『ペテルブルク通報』編集部では、59年4月はじめからその雑誌に「スラヴ欄」を新設する計画が浮上し、編集者のクラエフスキーは上記の条件を呑んで出版許可を取り付けている³²⁾。このようにして「スラヴの民族性についてはいかなるものであれ」新聞に掲載しない条件で発行許可を取り付けた『ペテルブルク通報』ではあったが³³⁾、これもまた、2月号に H.C. ツルゲーネフの訳で「ウクライナ民話マルコ・ヴォフチク」を印刷したため、問題視されていた³⁴⁾。とはいえ、政府の条件を受け入れて刊行している以上、イヴァンの目に『ペテルブルク通報』は政府の御用新聞に映った。イヴァンには、『ペテルブルク通報』には自由で民族的な共感ではなく、政府の統制下に成立し政府の政策の動揺次第の（したがってワルシャワ・ゴルチャコフの頭に浮かぶすべての新たなばかげた考え次第の）公式なもの現れがあると思えた³⁵⁾。

さて一方で、雑誌『ロシアの談話』には、政府の干渉を注意深く避けながら、ペログラードからのユーゴスラヴィア議会についての記事、ウィーンからのセルビア教会音楽についての「書簡」、クロアチアの正教オーブシチナについての記事など、公式の出版者であるコシェリョーフの心配をよそに「スラヴの記事」

が掲載され続けた³⁶⁾。イヴァンにとって、『ロシアの談話』は「官費の、政府の、ドイツペテルブルクの」『ペテルブルク通報』とは違った、「モスクワの、自立した、人民の、ゼムリヤの」雑誌だった³⁷⁾。

ところが肝心の『ロシアの談話』は59年にイヴァンを正式な編集者として許可を申請したがこれが認められず、結局60年の第2号を最後にコシェリョーフは廃刊を決意する。他方、すでに述べた新聞『汽船』発行計画が挫折した後の59年秋に、イヴァンは『ドゥーマ』と言う名前で新聞発行を計画したが、結局これも許可されなかった³⁸⁾。まさに八方ふさがりのこの状況、およびそれにもかかわらず信念を貫こうとする決意をイヴァンはラエフスキーに手紙で伝えている。「検閲総局は私に新聞『ドゥーマ』を出版することを禁じるのみならず、『ロシアの談話』について私がコシェリョーフの共同編集者になることも禁じた。会話の閉刊は敵対者たちにすら同情さえ引き起こした。誰もそれを尊敬することを禁じ得ないのだ」³⁹⁾。

ところで、『ロシアの談話』廃刊については、イヴァンが1959年6号の『ロシアの談話』誌上に『『ロシアの談話』閉刊の辞』と題して声明を発表している⁴⁰⁾。この声明においてイヴァンは、「我々は『ロシアの談話』の出版を停止する」と宣言し、それに続けて雑誌の民族性の宣伝機関としての意義を強調する。曰く「その定期的に配布される印刷された言葉、その我らの民族性についての友好的で公開の審議、が我らにとって貴重だった」「われわれは我らの文学的な旗印、生命と精神のあらゆる分野における民族的自意識の旗印、を聖なるものとして崇拝する」。そしてその上で「我々の中断された仕事が惜しい」と端的に感情をあらわにし、「最終的には読者自身が判断することだが」と断りながらも「我々の仕事は無為ではなく、我らの雑誌は有益で必要だった」と雑誌の意義を総括している⁴¹⁾。

イヴァンにとって、『ロシアの談話』はロシアの民族性という「思想の擁護のために戦った」。その結果、ロシアの民族性の問題、農村共同体の問題などの問題において、『ロシアの談話』の主張が今では社会の通説、「一般的な共通財産になっている」ではないか⁴²⁾。農奴制改革においても「農民の土地付き解放」に

クリミア戦争直後のイヴァン・アクサーコフスラヴ主義から汎スラヴ主義への展開 (大矢 温)

ついで最初に主張したのは『ロシアの談話』だった。このようにイヴァンはスラヴの民族性における『ロシアの談話』の先進性を誇るとともに⁴³⁾、「嘲笑や毒舌、悪口雑言」に屈せず、戦った結果、「次第に嘲笑は鳴りをひそめ、攻撃はおさまった」⁴⁴⁾として己の信念の正しさを再確認する。それに続けて「諸般の事情により、この問題がその十全な発展を遂げる、正にそのときに、廃刊を余儀なくされることは深く残念だ」と農奴制改革の議論の最中に廃刊を余儀なくされる無念さを露わにするのだった⁴⁵⁾。

このように農奴制改革における『ロシアの談話』の意義を確認した後、イヴァンは、『ロシアの談話』が国外のスラヴ系諸民族に及ぼした意義について話題を転じる。この面でも『ロシアの談話』の意義は大きい。今では「われらの抑圧された兄弟たちは、一人我々の雑誌のみならず、共感の現れに出会うことができるのだ」⁴⁶⁾。「我々はスラヴの問題を考古学的興味分野から新鮮な、現実的な共感分野に引き出し、我が国の文学的なスラヴ仲間のサークルにおいて知的な活動を復活させることに成功したのだ」⁴⁷⁾。このようにスラヴ系諸民族に対する雑誌の意義を強調するのだった。

かさねてイヴァンは「我らの兄弟たちに」ロシアのスラヴ主義者たちの拡張主義的意図を否定し、「我々の共感が彼らの独自の発展を侵害するものとは縁遠いこと」を説得する。「スラヴの民族性それぞれが独自であることの権利を承認することは、常にロシアのスラヴ主義者のモットーであり続けた」と⁴⁸⁾。

新聞『帆』に続いて雑誌『ロシアの談話』も廃刊に追い込まれ、新たな新聞にも発行許可が下りず、発言の機会を失ったイヴァンは傷心を抱えて1860年1月に外国に旅立つ。彼がロシアに帰国したのは61年の初めだった。この時期、スラヴ派自体もコンスタンチン・アクサーコフ、ホミャコフといった主力メンバーの死によって凋落傾向にあった⁴⁹⁾。1858年にスラヴ諸民族を支援するために設立された「スラヴ慈善委員会」もまた、慢性的な資金不足に悩まされていた⁵⁰⁾。

II. 農奴制改革と新聞『日』

1861年2月19日付でアレクサンドル二世によって「農奴解放令」が裁可された。この「解放令」によって、農奴たちは人格的には解放されたものの、共同体的秩序が温存されたため領主の権力から逃れることが出来なかった。土地を切り取られ、しかも用益権を認められた土地に対しても償還金の負担が重くのしかかった。総じて農民にとって内容を伴わない「解放」であった。

イヴァンもまた、農奴制改革直後のロシアの現実に不満だった。その不満とは、一義的には改革の内容であった。上述の通りこの「農奴解放」は土地付きであり、共同体も保存したことで一応はイヴァンら多くのスラヴ主義者の案に合致したものだ。しかしイヴァンは、この「解放令」がまず前提として土地を地主の所有物としていることを問題視した。ここから償還金や切り取り地など農民の負担において地主の利益を保証する制度が導かれるからである。

とはいえ、スラヴ主義者たちは農奴改革について新たな論戦を提起する余裕はなかった。スラヴ主義を標榜する定期刊行物は禁止されたままだったし、世論の支持もなかったからである。

そのような否定的な状況の中で1861年5月25日に、政府内部でも異論が出つつも⁵¹⁾、検閲総局から大臣会議の審議を経て「政治欄無しで」「モスクワ検閲委員会の監視下で」という条件付きながら、イヴァンに対して新しい新聞『日』の発行が許可された⁵²⁾。イヴァンにとっては新たな弁論活動を再開するチャンスだった。ただし、実際にイヴァンの新聞の発行が始まったのは10月のことであった。それまでの間、急進的西欧派を標榜する雑誌『同時代人』からの「ローマ没落の原因について」に代表される、スラヴ主義攻撃の論文に対しては、イヴァンは反論の手段を持っていなかった。イヴァンは「不倶戴天の敵」たる『同時代人』に反論する機会を渴望したのであった⁵³⁾。

また一方で、イヴァンを始めとするスラヴ派自体も、すでに曲がりなりにも農奴制改革が実現したことで、従来のように農奴制改革に向けた統一的な目標

クリミア戦争直後のイヴァン・アクサーコフスラヴ主義から汎スラヴ主義への展開（大矢 温）

を失っていた。ロシア各地からの農奴制改革の実情を報道しようとした「地方欄」にも記事が集まらなかった。したがって農奴制改革以後、イヴァンらスラヴ主義者によるスラヴ民族の研究はスラヴの連帯、という対外的な問題の方に向かざるを得なかった。

ロシアの現実に対するイヴァンのもう一つの不満は、クリミア戦争後のロシアの国際的地位だった。対外的な問題という点では、58年に設立された「スラヴ慈善委員会」の立て直しも焦眉の問題だった。ロシアは他のスラヴ諸民族の民族性が自由に発達することを援助する立場なのだ。そのためにはまずロシアが敗戦の痛手から立ち直らなければならない。西欧列強に対抗すべき国際的地位の回復は、国内改革と密接に連動しているのである。その点をイヴァンはラエフスキー宛 61年7月15日付の手紙で強調している。「スラヴ問題というのはスラヴ人にとってロシア以外に物質的精神的救済はないのに対して、ロシア自体が我を忘れて、繁栄の道にあるというよりは破滅の過程にある、ということに帰着せざるを得ない。ロシアが本当のロシアになるとき、スラヴ問題は自ずから解決されるだろう」⁵⁴⁾。

さて、いよいよ 1861年10月15日に週刊新聞『日』の創刊号が発行された。巻頭論文でイヴァンはまずは農奴解放令を「目覚めつつある人民生活の第一歩」と高く評価する。「1861年2月19日にロシア史の新たな紀元が始まったのだ」⁵⁵⁾。「新たな紀元の始まり」とは、直接的には農奴制改革後のロシア社会のことだが、再び言論の機関を手にしたイヴァンにとっても『日』の創刊は「新たな世紀の始まり」だったに違いない。スラヴ派は再び発言の場を手に入れたのだった。『日』はスラヴ派の伝統を継承した新聞だったのだ。

苦しみに満ちた遅い過程によって我が国では我らの自意識が達成された。キレエフスキー、ホミャコフ、およびコンスタンチン・アクサーコフといったロシア思想の苦行者たちはそのために無駄に生き、苦勞したのではなかった。彼らによって達成され、確立され、表現された見地は、我々が信じるどころ、ロシアの啓蒙史における転換点をなしており、灯台のように、今後の

我々の前に横たわる発展の道を照らしている⁵⁶⁾。

その上でイヴァンは『日』の使命を、スラヴ派の理論と農奴制改革後の社会的興奮とを「音叉のごとく」共鳴させることである、とする。具体的には大改革期のロシア世論にスラヴの民族性の意義を宣伝することである。しかもそれを時代が要求している。

スラヴ主義学派によって仕上げられた命題の多くがすでに今、一般的な資産となり、我が国の印刷業界の別の機関においてもその庇護者を見ることを、我々は喜びをもって見る⁵⁷⁾。

すでに述べたように『日』は非政治的な定期刊行物として許可されたが、イヴァンは出版に当たって『日』に「スラヴ欄」をもうけ、スラヴ問題に関する論文をここで発表している。創刊号に発表した論文も上記の巻頭論文がスラヴ派の伝統を強調したものだものに比べ、「スラヴ欄」に発表した論文はより反西欧的、汎スラヴ主義的な傾向を帯びている。『日』の創刊号の「スラヴ欄」に発表した論文においてもイヴァンは、ロシアの民族性、その自己認識の重要性を力説する。なぜならロシア人は自らの民族性について自己認識が足りないために「我々を野蛮人、あるいはほとんど人食い人種呼ばわりしている」⁵⁸⁾ 反ロシア的な西欧の論調に反論できないでいるのだ。

「ヨーロッパの評論家が武器を鍛造し、中傷を触れ回り、我々の道徳的な力を衰弱させている」のに対してロシアの側からは、西欧の敵意に対して反論できていない。「我々は沈黙する。我が方からは戦闘もなければ防衛もない」のだ。ロシアの他のジャーナリズムはともかく、自らの機関を持っていなかったイヴァンにとっては反論しようとしても反論できない状況だった。しかし、今やイヴァンは新聞『日』を許可された。「ついに我々は挑戦状を受け取り、自らのため、我らのスラヴの兄弟たちのために、果敢に評論のヨーロッパとの戦いに立ち上がる 때가来た！」⁵⁹⁾ 『日』によってスラヴの民族意識を宣伝しようとする

クリミア戦争直後のイヴァン・アクサーコフスラヴ主義から汎スラヴ主義への展開 (大矢 温)

るイヴァンの意気込みが感じられる。

イヴァンによればスラヴの民族意識はヨーロッパにおけるロシアの「力」である。「ヨーロッパにおける我らの力、我らに共感し、我らと親族の血と精神によって結ばれたスラヴ世界一般、特に正教世界、は、今、歴史の舞台に踏み出した」⁶⁰⁾。今こそスラヴ民族が団結して西欧に対抗するときだ。さらに他民族のくびきに服していない唯一のスラヴとして、ロシアは「物質的精神的抑圧からスラヴ諸民族を解放し (隔字体)」「力強いロシアの鷹の翼の庇護の元に、自立した精神的、あえて言えば政治的生活の贈り物をする歴史的使命、道徳的権利がある」、と熱弁するのだった⁶¹⁾。

このように『日』においては、従来のようにロシアの国内改革のための民族性の研究、という枠を踏み出して、スラヴ諸民族を糾合してヨーロッパにおけるロシアの地位を確立しようという志向、つまり大ロシア的汎スラヴ主義の志向が明確になっている。

イヴァンによる汎スラヴ主義の宣伝のための機関として『日』は61年10月15日に第1号が発行された後、61年中に11号まで、そして翌62年には12-52号が発行されたが、このような論調が災いして途中、34号が「至高のご意志により」停刊処分になっている。再び発行が許されたのは、10月15日号からであった⁶²⁾。

このように汎スラヴ主義を明確に打ち出して『日』が発行されると、『同時代人』を拠点にして急進的西欧派の立場から論陣を張るH.Γ.チェルヌィシェフスキーは、イヴァンの巻頭論文に対するほぼ逐語的な批判「民族的無理解」を發表してこれに対抗した。

この批判論文においてチェルヌィシェフスキーはまず、イヴァンのスラヴ派的な論点に対して西欧派としての立場から原則的な批判を展開する。まず、それはイヴァンの説く「スラヴ主義」の定義から始められる。チェルヌィシェフスキーによればロシア人民への愛情やスラヴ人種への共感といったものはイヴァンが説くように「スラヴ主義」とは呼べない。なぜなら、イヴァン以外のロシアの文筆家や雑誌も同様にロシア民族やスラヴ民族を愛し、同情している

からだ⁶³⁾。ここからチェルヌィシェフスキーは「スラヴ主義」を旗印に掲げるイヴァンの『日』が特徴に乏しいと論難するのだった。チェルヌィシェフスキーにとってイヴァンが「スラヴ主義」を旗印としていることは、イヴァンの「素朴さ」の証拠にしか過ぎない。スラヴ派の功績を評価した部分を引用しながら、チェルヌィシェフスキーは「キレエフスキー、ホミャコフ、コンスタンチン・アクサーコフ」によって「ロシア人民が蘇生した」と熱弁を振るうアクサーコフの「自画自賛」を冷たく嘲笑するのだった⁶⁴⁾。

スラヴの民族性を宣伝してヨーロッパ世論に対抗しよう、というアクサーコフの燃えるような意気込みに対してもチェルヌィシェフスキーは、「ヨーロッパ世論は物質的精神的、個人的および社会的生活の改善を志向しているが、何ぞ我々はその志向に対して戦わなければならないのか？」⁶⁵⁾と冷笑的にはぐらかしている。西欧派の立場からすれば、進歩を志向する西欧に対してロシアの民族性を盾に対抗することに積極的な価値は見いだせない。「我々は中世の残滓を大切に保持し、進歩によって廃れた苦難を復興しなければならないのだろうか？」⁶⁶⁾。

「民族性」を旗印に西欧世論に対抗しようとするイヴァンの方針に対しても、チェルヌィシェフスキーは、「我が国におけるあらゆる社会改革、あらゆる産業や農業における改良、あらゆる啓蒙の成功は、西欧において喜びを巻き起こしている」⁶⁷⁾として、むしろ西欧の世論はロシアの西欧化に好意的であると反論する。西欧派の立場を固持するチェルヌィシェフスキーにとってロシアの未来はあくまで西欧的近代化にあったのだ。

続いて、チェルヌィシェフスキーの批判はイヴァンの汎スラヴ主義的志向に向けられる。スラヴ諸民族の共感を「ヨーロッパにおける我らの力」とみなすイヴァンの汎スラヴ主義的主張に対してチェルヌィシェフスキーは、「我らの力は」「別のスラヴ人種ではなく、我ら自身、我ら自身である」と真っ向から反論する⁶⁸⁾。

さらに他民族の「物質的精神的抑圧からスラヴ諸民族を解放する」というロシアの「歴史的使命、道徳的権利」についても否定的である。チェルヌィシェ

クリミア戦争直後のイヴァン・アクサーコフスラヴ主義から汎スラヴ主義への展開（大矢 温）
フスキーにとってロシアの権利にして義務は「自国の福祉に配慮すること」である。「力強いロシアの鷹は、非常に多くの、自国のロシアの問題を抱えているのだ」⁶⁹⁾。

そしてその上でチェルヌィシェフスキーは、「戦争無しではいかなる民族も他民族のくびきから解放されない」こと、およびロシアがスラヴ民族の独立を支援すればオーストリアやトルコとの戦争は避けられないこと、を指摘して、イヴァンに対して「ロシアがトルコやオーストリアと戦争を始めることをお望みですか」と問い正すのだった⁷⁰⁾。クリミア戦争で露呈したロシアの国際的孤立状態と枯渇した国庫、および農奴制改革直後の混乱した国内情勢を踏まえた、冷静な社会評論家の目からする、現状を無視したイヴァンの「センチメンタルな」構想に対する批判である。

そもそも現下の国際情勢を鑑みれば、スラヴ諸民族の民族解放運動にロシアが介入することによって、かえって解放が困難になる、これがチェルヌィシェフスキーの立論である。したがってトルコ領内のスラヴ民族の解放についても、イヴァンが主張するロシアの介入によって、かえって彼らの解放が困難になるのだ、とイヴァンの主張を切り捨てる。ヨーロッパの列強はトルコが崩壊した後にスラヴ圏を足がかりにロシアが南進するのを恐れてトルコを援助しているのだから、むしろヨーロッパに向かってロシアが南進する意図がないことを説得する方がスラヴの解放の役に立つではないか、という論法である。

同様に「ロシアの力によるオーストリア・スラヴへの援助」というイヴァンの「センチメンタルな吐露」も「オーストリア・スラヴの問題に害を及ぼす」⁷¹⁾と真っ向から否定する。その上でチェルヌィシェフスキーはトルコやオーストリアに支配されているスラヴ民族に対して訴える。「我々の援助はあなた方に必要ではなく、あなた方に有害だ。そう、我々にとってもあなた方の解放のために戦うのはあまりに重荷だ。我々を当てにしないで、自分たちの中に力を探みなさい」⁷²⁾。

このようにスラヴ民族に対する「愛」を否定し、イヴァンの国際情勢に対する無理解を批判した上でチェルヌィシェフスキーは、スラヴ派が誇る「愛」が

スラヴ民族に対する「愛」ではなく「彼らを我々に服従させようとする利己的な打算」であり、イヴァンが望んでいるロシアの介入が「彼らへの善行」ではなく、「自らの力を拡大しようという欲求」だとその大ロシア主義的な拡張的意図を暴露するのだった⁷³⁾。

さらにチェルヌィシェフスキーは、「我々だけが純粋なスラヴの民族性を保持している」とするスラヴ派の論調の中にもまた、言語や宗教におけるロシア化、ロシアの拡張主義を見る⁷⁴⁾。ロシア語をスラヴの共通語にすれば個々のスラヴ民族の民族性は自らの言語を放棄しなければならないし、チェコ人やスロヴァキア人などは自らの信仰を捨てて正教に改宗しなければならない。「すべては我々ロシアの秩序に従って、唯一の純粋なスラヴの秩序の例に従って、変えなければならない」ではないか⁷⁵⁾。このように総じてチェルヌィシェフスキーの批判は、「民族的無理解」という題名が示すとおり、アクサーコフのスラヴ民族の状況に対する無理解、そして彼の論理に潜む拡張主義的傾向に向けられたものだった。

さて、直接的にこのチェルヌィシェフスキーの批判に答えたものではないが、イヴァンは『同時代人』への寄稿者で歴史学者のH.H. コストマーロフに宛てた61年10月30日付けの個人的な手紙の中で、今度は「歴史と民族」つまり宗教の側面から『同時代人』の見解に反論している。彼の反論の要点は『同時代人』が宗教の問題を過小評価している、というものだった。

たとえばカトリックのポーランド貴族とその支配下で正教徒である小ロシア系農民との反目的関係について『同時代人』が、「信仰上の戦い」について忘れ、農奴制の廃止をもって小ロシア人とポーランド人との間における敵意の「最後の火花」が消えると主張している点について、イヴァンは『同時代人』が両者の対立を経済問題に収斂させ、民族的な反感を無視している、と批判した⁷⁶⁾。イヴァンによれば、むしろ小ロシア人は大ロシア人に自らの解放の希望を託している⁷⁷⁾。小ロシア人はロシアのツァーリの中に「自分を支配するポーランドのパン(シュラフタ)や自分を抑圧するほかの諸身分と対決する支柱を発見する」⁷⁸⁾。

ロシアの文化的、政治的拡張主義に対する批判に関してもイヴァンは一連の

クリミア戦争直後のイヴァン・アクサーコフスラヴ主義から汎スラヴ主義への展開（大矢 温）

反論を展開している。たとえば他のスラヴ諸民族のロシア語化の問題については、小ロシア人である作家ゴーゴリが『死せる魂』をロシア語で書いた例を挙げてこれを正当化する⁷⁹⁾。また、政治的統一の問題について彼は、ロシアからの分離独立を志向するポーランドを警戒する。特にポーランド問題に関してイヴァンは、ロシアからの独立を志向するポーランドが民族的独立の際にガリツィア地方やキエフの領有をもくろんでいるとして、これには、「一片のロシアの地も彼らに渡さない」と強硬な姿勢を崩さない⁸⁰⁾。

コストマーロフによるイヴァンに対する再反論はまさにこの点に集中する。イヴァンに返答する書簡の中でコストマーロフは、南ロシア人に対して自分たちの言葉を禁じてロシア語を強制しようとするイヴァンに向けて、「強制的な国家の立場で帝政第三課に協力したまえ」と舌鋒鋭く批判し、南ロシアでのロシア語化に反対し、「首に縄をつけるような」押しつけの援助をやめて自由な自治を認めるよう主張している。ガリツィア地方の領有をもくろむポーランドに「一片のロシアの地も彼らに渡さない」と強硬な姿勢を示すイヴァンに対しては、その「ロシアの地」に住む「小ロシア人がポーランドに共感を示し、ポーランドへの併合を願った」場合にどうするのか、と、ガリツィア地方の地域住民の意見を無視したイヴァンを批判している。ここでもコストマーロフはイヴァンによる押しつけの解放を批判したのだった⁸¹⁾。

さらにコストマーロフの批判は、イヴァンが説く「言論の自由」におよび、その欺瞞性を暴く。コストマーロフによれば『同時代人』との論争において「キリスト教正教的見解を持つ」イヴァンが直截に意見を表明できるのに対してチェルヌィシエフスキーは検閲の網の目をくぐりながら反論しなければならない。「あなたにはあらゆる武器が手に入るが、彼にはないのだ！」⁸²⁾。イヴァンの見解が政府寄りであり、それゆえイヴァンに対して検閲が好意的に緩和されている、との論難である。しかし、これはコストマーロフの誤解、というよりひがみである。すでに述べたようにスラヴ主義も政府から危険視されていたのである。奇しくも『同時代人』と『日』に停刊処分が同時に下されたことがこのことを物語っている。

1862年6月に『同時代人』『ロシアの言葉』に8ヶ月間『日』には6ヶ月間の停刊処分が宣言された⁸³⁾。とはいえ、後に『日』の停刊処分は短縮され、『日』は9月1日から再開されたので、コストマーロフの論難も全く根拠がないというわけではなかったのかもしれない⁸⁴⁾。

むすび

『同時代人』、『ロシアの言葉』、および『日』に対する一連の停刊処分のニュースは、当時ロシア政府の検閲が及ばない亡命先のロンドンで自由出版活動を続けていたゲルツェンの元にまで届いた。彼は、一連の停刊処分を知ると、自らの新聞7月15日付の『鐘』に「出版者から」と題する公示を発表し、停刊処分となった雑誌の出版者たちに寛容な援助を申し出る。「われわれは『日』、『同時代人』、『ロシアの言葉』の出版者、およびロシアにおける政治テロルの結果、禁止されるであろう雑誌の編集者に、ロンドンにおいてそれらの出版を続けることを提案する。とりあえず我々は、必要であれば当方の負担で、あらゆる報償なしで、印刷する用意がある」⁸⁵⁾。

ところがこのゲルツェンが援助の申し出は、これをチェルヌィシエフスキーの革命的陰謀への関与の証拠と見なすロシア政府によって、チェルヌィシエフスキー逮捕の口実となってしまった⁸⁶⁾。イヴァンとの論戦において、一貫して、押しつけの援助がスラヴ諸民族のためにならないことを主張し続けたチェルヌィシエフスキーにとっては全く皮肉な結果であった。

他方、イヴァンの『日』もまた、1864年になると深刻な不振に見舞われる。停刊処分の後に反政府的色彩が弱まると、読者のみならず、寄稿者の数も減った。掲載すべき新鮮な情報が寄せられなくなったのだ。地主貴族に向けた「ゼムリヤの身分となる」訴えかけも大きな反響は呼ばなかった。結局イヴァンは翌1865年7月12日号の後、2ヶ月間雑誌を休刊して旅行に出てしまう。1865年の検閲改革によって65年9月号から『日』は事前検閲を免れるようになったが、それにもかかわらず『日』の凋落は止まらなかった。結局65年にイヴァン

クリミア戦争直後のイヴァン・アクサーコフスラヴ主義から汎スラヴ主義への展開 (大矢 温)

は廃刊を決意する。

農奴改革に向けて国内問題として「民族性」に注目してきたイヴァンのスラヴ主義は、農奴改革後は主に国外のスラヴ系諸民族に対する汎スラヴ主義へと発展した。しかしイヴァンの汎スラヴ主義は『日』の廃刊に見られるように世論の支持を得ることが出来なかった。なお、このような否定的な状況から 1870 年代後半にみられる国民的な盛り上がりに至る汎スラヴ主義への世論的な支持動向については稿を改めて分析したい。

注

- 1) 発行の経緯については、См. Кошелев А.И. Записки А. И. Кошелева. МГУ, 1991. С. 95.
- 2) 当時のスラヴ派は、西欧派との論戦において農村共同体と正教をロシア民族の特殊性と主張したが、チェルカッスキーはどちらにも否定的だった。См. Там же. С. 96.
- 3) Аксаков И.С. Письма к о. М.Ф. Раевскому от 23 августа 1858//Иван Сергеевич Аксаков в его письмах. С-Пб, 1896. Т. 4. С. 3. Кошелев. С. 102-103.
- 4) 「Very Dangerous!!! 論争」については、Imai, Y. “The London Meeting of Herzen and Chernyshevskiy in June 1859” 『工学院大学研究論叢』、1969 年第 8 号、石川郁男『ゲルツェンとチェルヌィシエフスキー』未来社、1988 年、76-103 頁、および拙稿「ゲルツェンの自由出版活動と《Bureau de la presse》計画」、『法学新報』、平成 6 年第 100 号第 3-4 号、参照。
- 5) См. Цимбаев Н.И. И.С. Аксаков в общественной жизни пореформенной России. МГУ, 1978. С. 61-62.
- 6) ウィーン駐在のロシア大使館付属教会の司祭で後にスラヴ慈善協会の有力なメンバーともなる М. Ф. Раевский に打ち明けた当初の予定では『帆』は 58 年 10 月から週刊誌として刊行される予定だった。Аксаков И.

С. Письма от 22 июня 1858. Т. 4. С. 2.

- 7) *Он же*. Об издании в 1859 году газеты “Парус”//*Аксаков К.С., Аксаков И. С.* Литературная критика. М., 1981.
- 8) Там же. С. 253.
- 9) Там же.
- 10) Там же. С. 254.
- 11) Там же.
- 12) Чельнов И.С. 1855年には共同体を「消失しつつある遠い過去の遺制」と考え、共同体によって「スラヴ人だけが人間生活の理想を実現する」と考えるスラヴ派を批判していた。*Чернышевский Н.Г.* Архив историко-юридических сведений//Полное собрание сочинений в 15-ти т. М., 1949. Т. 2. С. 737-738.ところが彼は半年後にはスラヴ派に歩み寄り、「スラヴ主義と呼ばれる思考様式が、いかなる見地からしても全く是認でないにしろ、とにかく正当なものであり共感に値するものである」と認め始める。*Он же*. «Русская беседа» и славянофильство//Там же. Т. 4. С. 723.さらに1857年には「スラヴ主義にはスラヴ主義者をもっともまじめな西欧主義者の多くのものよりもより高く評価せしめる側面がある」と共同体擁護に回っている。*Он же*. Славянофилы и вопрос об общине// Там же. С. 738.
- 13) *Аксаков И.С.* Об издании... С. 254.
- 14) Там же.
- 15) Там же. С. 255.
- 16) Там же.
- 17) Там же.
- 18) Там же.
- 19) Там же.
- 20) *Аксаков И.С.* Письмо Раевскому от 23 августа 1858//*Аксаков* в его письмах. Т. 4. С. 5-6.

クリミア戦争直後のイヴァン・アクサーコフスラヴ主義から汎スラヴ主義への展開 (大矢 温)

- 21) 文部官僚で検閲行政にも従事していたニキテンコはその日記の中で「ポーランド貴族にそそのかされたゴルチャコフ」による『帆』の発禁の噂を伝えている。他方、翌17日の日記では『帆』3号が事前検閲のためにペテルブルクに送られることを条件に出版されると書いているのでこの時点では情報が錯綜している様子がうかがえる。*Никитенко А.В.* Дневник от 16-17 января 1859. М., 1955. Т. 2. С. 55-56.
- 22) *Аксаков.* Письмо от 4 декабря 1859. Т. 4. С. 26.
- 23) これについてゴルチャコフは、「ロシアは立腹しているのではない。ロシアは集中しているのだ。」という名文句を残している。*Горчаков А.М.* Циркуляр А.М. Горчакова российским дипломатическим представителям за границей//*Примаков Е.М.* и др. ред. Канцлер А.М. Горчаков. М., 1998. С. 122.
- 24) *Аксаков.* Письмо от 13 апреля 1859. Т. 4. С. 20.
- 25) Там же. С. 21.
- 26) ニキテンコの1月23日の日記ではチマーシェフがイヴァンをヴァトカに追放しようとしている噂が記されているが、当のニキテンコはそれを「陛下はそれに同意しないだろう」と予想し、追放については「それは大きな誤りとなろう」と否定的だ。*Никитенко.* Указ. соч. Т. 2. С. 56.
- 27) *Аксаков.* Письмо от 13 апреля 1859. Т. 4. С. 18.
- 28) Там же.
- 29) Там же. С. 20.
- 30) Там же. С. 21.
- 31) Там же.
- 32) 『ペテルブルク通報 С.-Петербургские Ведомости』は1703年にピョートル大帝の勅令で創刊された『軍事その他の通報 Ведомости о военных и иных делах』を引き継ぐ形で科学アカデミー、後には文部省の雑誌として1728年に創刊された。59年当時はクラエフスキーの協力の下に А.Н. Очкинが出版権を賃貸して出版していた。См. *Лисовский Н.М.* сост.

Библиография русской периодической печати. Петроград, 1915. С. 3.

- 33) См. *Аксаков*. Письмо от 13 апреля 1859. Т. 4. С. 22.
- 34) *Никитенко*. Дневник от 19 марта 1859. Т. 2. С. 77.
- 35) *Аксаков*. Письмо от 13 апреля 1859. Т. 4. С. 23.
- 36) Там же.
- 37) Там же. С. 24.
- 38) См. *Цимбаев*. Указ. соч. С.65.
- 39) *Аксаков*. Письмо от 4 декабря 1859. Т. 4. С. 26.
- 40) *Аксаков И.С.* Заключительное слово «Русской беседы»// *Греков В. Н.* сост. И.С. Аксаков: Отчего так нелегко живется в России? М., 2002. С. 107.
- 41) Там же.
- 42) Там же.
- 43) Там же. С. 109.
- 44) Там же. С. 108.
- 45) Там же. С. 109.
- 46) Там же.
- 47) Там же. С. 110.
- 48) Там же.
- 49) *Иван*はラエフスキー宛の手紙の中でスラヴ派が離散し、新聞も不調な様子を訴えている。*Аксаков*. Письмо от 15 июля 1861. Т. 4. С. 57.
- 50) См. *Никитин С.А.* Славянские комитеты в России в 1858-1876 годах. М., 1960. С. 44.
- 51) *Никитенко*は61年4月8日付の日記に『日』の許可を巡って文部大臣が検閲総局と第三課を経由せず皇帝に直訴したため、第三課長官ドルゴルーコフとチマーシェフが立腹したことを記録している。*Никитенко*. Указ. соч. Т. 2. С. 183.
- 52) См. *Цимбаев*. Указ. соч. С. 71.

クリミア戦争直後のイヴァン・アクサーコフスラヴ主義から汎スラヴ主義への展開 (大矢 温)

- 53) この閉塞的な状況をイヴァンは61年9月25日付のラエフスキー宛ての手紙の中で次のように書いている。「『同時代人』の記事は忌まわしい」「われわれが不倶戴天の敵であっても、反論すべき場所がどこにもない」「私には新聞が許されていたが、ほとんど発行できないぐらい圧迫され抑圧された。他方『同時代人』はすべて網の目をかいくぐるのだ」。Аксаков. Письмо. Т. 4. С. 67.
- 54) Там же. С. 60.
- 55) Аксаков И.С. Возврат в народной жизни путем самосознания//Полное собрание сочинений И.С. Аксакова. М., 1886. Т. 2. С. 4.
- 56) Там же. С. 6.
- 57) Там же.
- 58) Аксаков И.С. Славянский обзор//Полное собрание сочинений. Т. 1. С. 4.
- 59) Там же. С. 5.
- 60) Там же.
- 61) Там же. С. 6.
- 62) これについては検閲当局内でも議論が分かれた。文部大臣ゴロヴニン問題は問題を重視して厳しく叱責したが、ニキテンコはこれを検閲緩和を志向する「私に対する個人的な敵意の表明」ととらえている。См. Никитенко. Дневник от 26 июня 1862. Т. 2. С. 282.
- 63) Чернышевский Н.Г. Народная бестактность//Полное собрание сочинений. Т. 7. С. 828-829. 『同時代人』誌との論争については、В.А. Дьяков著、早坂真理、加藤史朗訳『スラヴ世界』彩流社、1996年、234-237頁参照。なお、「ロシア帝国の現実」がアクサーコフを満足させなかった理由としてДьяковは『鐘』誌や『同時代人』誌が執拗に民族主義傾向を非難したこととともに「農地改革が地主的性格をもっていたこと」を挙げているが、むしろアクサーコフの不満の主要な原因はクリミア戦後のロシア国内の混乱と西欧に対抗すべき国際的地位の低下にあったと解すべき

である。

- 64) Там же. С. 829.
- 65) Там же. С. 830.
- 66) Там же.
- 67) Там же. С. 831.
- 68) Там же. С. 834.
- 69) Там же. С. 836.
- 70) Там же. С. 837.
- 71) Там же. С. 837-838.
- 72) Там же. С. 843.
- 73) Там же. С. 842.
- 74) Там же. С. 842-843.
- 75) Там же. С. 843.
- 76) *Аксаков*. Письмо к Н.И. Костомарову от 30 октября 1861. Т. 4. С. 258.
- 77) Там же.
- 78) Там же. С. 260.
- 79) Там же. С. 259.
- 80) Там же. С. 260.
- 81) Там же. С. 264.
- 82) Там же. С. 266.
- 83) 後に『日』については編集者をサマーリンにすることによって処分が緩和され発行が許可された。さらに8月に63年1月1日からアクサーコフに編集者に復帰することが許された。См. *Милютин Д.А.* Воспоминания. М., 1999. Т. 4. С. 360.
- 84) このように停刊処分が短期間で終わったのは、ロシアの外交政策上『日』の重要性を認識していた外務省アジア課が関与していたと言われる。См. *Цимбаев*. Указ. соч. С. 119.

クリミア戦争直後のイヴァン・アクサーコフスラヴ主義から汎スラヴ主義への展開（大矢 温）

85) *Герцен А.И.* От издателей//Собрание сочинений в 30-ти т. М., 1959.
Т. 16. С. 214.

86) 石川郁男『ゲルツェンとチェルヌィシエフスキー』、1988年、未来社、254
頁参照。

（本研究は、平成20年度札幌大学研究助成制度による研究成果の一部である。）